手作り紙芝居

2・16　「日蓮大聖人ご聖誕の日」

はじめに　（６枚目の絵の裏に貼る）

2月16日は日蓮大聖人ご聖誕の日です。

皆で日蓮大聖人のご生涯を学びあい、その精神に触れていきましょう。

１枚目／ご聖誕　（６枚目の絵の裏に貼る）

日蓮大聖人は貞応元年（1222年）2月16日、安房国（現在の千葉県鴨川市）で出生されました。大聖人ご自身が、「遠国の者・民が子」（御書1332ページ）等と言われているように、漁業で生計を立てる庶民の生まれでした。

２枚目／「日本第一の智者となし給へ」　（１枚目の絵の裏に貼る）

12歳で清澄寺へ登り、当時の初等教育を学んだ大聖人は、16歳で道善房を師匠として正式に出家しました。

当時の鎌倉では、天変地異、飢饉、疫病が相次ぎ、誰一人苦悩に沈まない人はいませんでした。この状況に深く心を痛められた大聖人は、父母らをはじめとする民衆を救う智者になりたいと願われ、「日本第一の智者となし給へ」（御書893ページ）との誓願を立てられました。

3枚目／立宗 宣言　（2枚目の絵の裏に貼る）

大聖人は、各地の諸寺を巡り一切経を精読するとともに、各宗派の教義の本質を究明されていきます。“自身が悟った妙法とは法華経の肝要である南無妙法蓮華経であり、一切経の根幹である法華経をないがしろにする諸宗は、人々の成仏の道を閉ざしている”と結論されるのです。

そして、大難が起こることを覚悟のうえで妙法弘通の実践に踏み出すことを決意され、建長5年（1253年）4月28日、32歳の時に、清澄寺で念仏などを破折するとともに、「南無妙法蓮華経」こそが末法の世界中の民衆を救う唯一の法であると宣言されました。これを立宗宣言といいます。またこの頃に、自ら「日蓮」と名乗られました。

4枚目／種々の大難と発迹顕本　（3枚目の絵の裏に貼る）

大聖人への難が本格化するのは、民衆の安穏と平和を心から願い、「立正安国論」をもって時の実質的最高権力者・北条時頼を諫められた時からでした。

松葉ケ谷、小松原・竜の口と続く法難。そして、伊豆、佐渡の2度に及ぶ流罪。それでも大聖人は、民衆救済を誓う法華経の精神のままに正義の闘争を続けられました。

これらの大難の頂点が竜の口の法難・佐渡流罪でしたが、平左衛門尉が刑を執行しようとした時、江の島の方から“まり”のような光り物が北西の方向へ夜空を走ったのです。兵士たちは恐れ、大聖人を斬首することはできませんでした。

この時以来、大聖人は末法の御本仏としてのお振る舞いを示されていきます。これを発迹顕本といいます。

5枚目／身延入山・熱原の法難　（4枚目の絵の裏に貼る）

佐渡流罪赦免後、大聖人は鎌倉に帰られ、幕府を諫められます。そして、文永11年（1274年）の5月に甲斐国（今の山梨県）の身延山へ入られました。

大聖人の身延入山後、弘安2年（1279年）、熱原の農民信徒20人が無実の罪で逮捕されました。平左衛門尉が鎌倉で厳しい取り調べを行い、法華経の信心を捨てるよう脅しましたが、農民たちは信心を貫き通し、3人が処刑され、残りの17人は追放処分に遭ったのです。これを熱原の法難といいます。

大聖人は、民衆が大難に耐える強き信心を確立したことを感じられて、10月1日に著された「聖人御難事」で、立宗以来「二十七年」目にして、大聖人自身の「出世の本懐」を示されました。「出世の本懐」とは、この世に出現した目的という意味です。

この熱原の法難において、三大秘法の南無妙法蓮華経を受持して、不惜身命の実践で広宣流布する民衆が出現したことにより、世界の人々を救うための日蓮大聖人の民衆仏法が現実のものとなりました。

このことにより、生涯をかけた根本目的、「出世の本懐」を達成されたのです。

そして、すべてを日興聖人に託し、弘安5年（1282年）10月13日、61歳の尊い御生涯を終えられました。

6枚目／創価の師弟　（5枚目の絵の裏に貼る）

「大願とは法華弘通なり」(御書736ページ)との大聖人の御遺命のままに「一閻浮提広宣流布」を実現してきたのが創価学会の三代の師弟です。

戦後間もない昭和27年（1952年）4月28日、戸田先生が出版願主となり、発刊された「日蓮大聖人御書全集」は現在、多くの言語で翻訳され、世界中の人々に日蓮大聖人の教えが広まりました。

池田先生は教えて下さっています。

「忘れてはならないことは、大聖人の不惜の実践とは、すべて経文通りであられたということです。今日の私たちでいえば、〝御書の通り〟〝大聖人の仰せの通り〟ということであります」と。

戸田先生は、『信心は日蓮大聖人の時代に還れ！』と叫ばれました。大聖人の御生涯と御精神を心に刻み、池田先生と共に世界広布に邁進して参りましょう。

決意など